

## 12月第4週の礼拝説教

■日 時：2022年12月25日（日）10：30－11：30 クリスマス礼拝

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「彼らの泊まる場所」

■聖 書：ルカによる福音書2章1～7節（新約p102）

■讃美歌：261「もろびとこぞりて いざ、むかえよ。」271「喜びはむねに 満ちあふれる、」

2022年のクリスマス礼拝を、立川教会で皆様とおささげできる幸いを、今年は特別に深く感謝をいたしております。その理由は、私自身が12月8日（木）に入院し、翌12月9日（金）に手術を受けて、このように立川教会に帰って来ることができたからです。今、振り返ってみますと、2022年4月に立川教会に赴任したときからずっと一筋の道が示されていたと確信しています。立川に来てからかかりつけになったクリニックのエコー検査で、ステージIの段階で腎臓癌が発見されました。そして、この立川教会から最も近い立川病院を紹介され、支援ロボット「ダ・ヴィンチ」を用いて腎臓の部分切除という形で治療していただきました。その時の私は、手術台上がってすぐに「神様、私の命をみ手にお委ねします。」と祈るはずでしたのに、その前に全身麻酔がかかってしまいました。また、手術から目覚めたらすぐに「神様、お守り下さったことを感謝します。」と祈るはずでしたのに、主治医の言葉がけと長女の顔が眼前にあることに安心して、再び目を閉じてしまいました。とっさの時に祈りの言葉が口をついて出てこなかったのは、いかに普段からのお祈りができていなかったかという結果であることを反省させられました。けれども、主なる神様が御用のために働くようにと生かしてくださったことに改めて感謝し、新しく歩み出したいと願っています。

ところで、クリスマスの時期に毎年のように行われる教会学校の子供たちによる降誕劇や幼稚園児や保育園児のクリスマスの劇を、これまで数多く見てきましたし、役を振られて共に演じてきたこともあります。このいわゆるページェントと呼ばれる劇は、本日の聖書箇所であるルカによる福音書2章やマタイによる福音書2章などの記述を中心に構成されています。本日の箇所では、皇帝アウグストゥスの勅令によって、ガリラヤのナザレに住むヨセフとマリアが、住民登録をするために遠いユダヤのベツレヘムまで旅をしなければならなかったことが記されています。マリアの出産が迫っていたのに旅をしなければならなかった若い夫婦の不安はどのようなものだったのでしょうか。そして、ようやくベツレヘムに着いた時、マリアはいよいよ産気づきました。しかし、あちらこちらの宿屋を探しま

したが、どこも住民登録のための客で一杯になっており、泊めてくれるところがありませんでした。部屋といっても今のホテルの客室などとは違い、大きな客間で寝る場所を決められて雑魚寝をするといった状況だったと思います。おそらく、その場にいた誰もが旅の疲れで体を横たえており、身重の妻とその夫を気遣って場所を譲ってくれる人は誰もいなかったということになります。それでマリアは、馬小屋で主イエスを産み、飼い葉桶に寝かせなければならなかったのです。園児たちの「トントントン、やどやさん。どうかひとばんとめてください。」「どこのおへやもいっぱいですよ。となりのやどやへ行ってください。」「こまった、こまった、どうしよう。」という歌での応答が何回か繰り返され、最後に、「うまごやならばあいてます。」という声に案内されて、マリアとヨセフが幕の内に消えていくというページェントのストーリーを思い出します。

この話を、大人向けに解釈し直しますと、二つのことが見えてきます。一つは、時の権力者の身勝手な命令に振り回される貧しい庶民の苦しみの中で救い主イエスがお生まれになったのだということです。もう一つは、本日特に注目したい7節に「**宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである**」と記されていることです。それは単に部屋が空いていなかったということではなく、北のナザレから南のベツレヘムまで約130キロもの長旅をしてきて疲れ果てている、今にも子供が生まれそうになっている夫婦に、手を差し伸べて出産をさせてやろうとする人は一人もいなかったということです。言い換えれば、その宿屋にいた人々の中に、誰にでも一目見てわかるように困っている貧しい夫婦を迎え入れようとする思いがなかった、それほどまでに人々の心が自分自身のことだけで精一杯になっていたということを意味しているのです。そして、そのように誰にも迎え入れられず、顧みられない中で、主イエス・キリストはお生まれになったのだ、ということです。このことから私は、52年前の受洗準備会の時の話を思い出しました。おそらく、その時の母教会の牧師が読んでくださったのは、コリントの信徒への手紙一6章19～20節の「**19 知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。**」という箇所だったと思います。そして、洗礼を受けるということは、自分自身の心の中心に玉座を設けて、主イエス・キリストをお迎えする、ということなのだを教えていただいたのです。そして今年は、本当のクリスマスとはそのようなことである、と深く気付かされました。主イエス・キリストが私たちの間に下ってこられてお宿りになろうとするとき、私たちは心からそのことに感謝し、「どうぞお泊りください。」と迎え入れ、その導きに身を委ねて、共に励ましあいながら進んでまいりましょう。

